翻　　訳

カール・S・グートケ著

「審判者」か「ランプの油」か？

——伝記の中のシラーの最期のことば——　(一)

信　岡　資　生　訳

1

5月11日から12日にかけての深夜にシラーは墓地へ運ばれた。[1] それも1805年5月21日の『上流社会報(ツァイトゥング フューア ディー エレガンテ ウェルト)』に掲載された目撃者の投稿によれば「ごくごくひっそりと」。

（安物の木棺を担いだ「文士仲間たち」の）葬列は真夜中過ぎの時刻に街を通り抜けてヤーコプ教会墓地へ向かった——のろのろと重たげに(担ぎ手の人数が足りなかった)，しずしずと，見物人も随員もいないままに。この有名なシラーほどひっそりと葬られた人間は世界中にないと思われるほどであった。月の明るい夜であった。物みなしーんと寝静まっていた。あたりには悲しみの嘆息一つ漏れず，嗚咽の声一つしなかった——ただ教会の屋根をカタカタ鳴らして吹く風音のみが黄泉路の伴奏となって遠くからものおそろしく聞こえた。月が黒い雲間に隠れたとき棺が傍の小さな穴の中に沈められた。[1)]

暗黒のしじま——トーマス・マンはシラー講演[2]の冒頭でその息詰まる

1)　Max Hecker 編：Schillers Tod und Bestattung, Leipzig 1935, S. 241f.

ような雰囲気を描写してみせたが――これは，シラーが息を引き取った途端に人々が勝手にしゃべり始めたのと奇妙な対照であった。シラーが亡くなったのは屋根裏部屋の修道士が寝るような簡素なベットの中で，二歩ばかり離れたところに書き物机があって，その上にはまだ彼が死ぬ間際まで書いていた『デメートリウス』[3]の中のモノローク「おお何故おれはここに押し込まれ，縛られて……」が置かれていた。肉体の生命が消え失せるやいなや，思い出がとてつもなく強烈に燃え上がった。シラーの最期のとき，彼の最期のことばについての噂がワイマルの街中に，世界中のドイツ語を話す人々の間に飛び交った。彼の没後10年も経たない1813年11月18日にシャルロッテ・フォン・シラー[4]は皇女カロリーネ・ルイーゼ[5]に宛てて次のように書いた。

> ご存じの通り私は私の邸宅をシラーの神聖な思い出として愛おしんでいます。何と言っても私がこれを暴力から守り，祭壇に身を寄せるようにシラーの像の下へ逃げ込んだのでしたから。ありとあらゆる国の人々がこの家を見に私のところへやって来ました。ロシアの奥地から将校たちが訪ねて来てシラーが愛読し使った本を欲しがりました。ことばが通じませんので彼らと話すことはできませんでしたが，私はとても感動しました。プロイセンの人，リーフラント[6]の人，オーストリーの人もやって来て私といっしょに泣いてくれました。シラーの生涯最後の日々の様子を泣きながら語り合いました……[2)]

そのとき彼女は，以前から進んでよく話したように[3)]，シラーのキス，最後のキスのことも話したことであろう。またシラーの最期のことばも話したにちがいない。だが，いったいどの最期のことばを――いわば聖遺物

2) Charlotte von Schiller und ihre Freunde, Bd. I, Stuttgart 1860, S. 667.
3) 例えば注1)のヘッカー編の書71頁を参照。

として（なにしろ対ナポレオン解放戦争当時は学徒志願兵の手にもシラーの原稿の切れ端が護符として握らされ，これを受けて彼らは天敵との戦いに勇躍出陣して行ったと言われているほどだから）シャルロッテは語り伝えたのであろうか？　プロテスタントはカトリック教徒に対し，事あるごとにけんか腰で強調したものだ，真の聖遺物は死にゆく者の最期のことばなりと。だからシラーの「ロロさん」[7]は，若いハインリヒ・フォス[8]よりも良いものを提示できたことであろう。このフォスという男はシラーの臨終にはその身辺に居て，そのあと直ぐ「すばらしい聖遺物」として「彼の聖なる頭から取った数本の毛髪」を，あるいはまた「高貴なる御方の頭の巻毛」を郵便で友人たちに送ったが，宮廷顧問官夫人[9]からもらったシラーの「一番良い煙草パイプ」だけは自分の手許に置いたのである。[4)]

ほんとうにどの最期のことばをシャルロッテは伝えたのであろうか？1791年にもう死を宣告されたシラー自身がいずれにしても生涯の最後の15年間を「死の不断の警告」のうちに過ごした，それはエーミール・シュタイガー[10]が断言するように「世界の全文学においてもその例を見ず，昔の殉教者伝説とのみ比べられ得るほどの…苦痛」[5)]であったと見られるだけに，またシラーはその作品から見て誰しも認める最期のことばの権威[11]であっただけに，シャルロッテがシラーの最期のことばを（1813年になってはじめてではなく，それ以前に）話したことは確実と見られよう。実際シラーはドラマの幕切れだけでなく，生の終わりを（「私は長い眠りにつかねばならぬと思う」[12]から「彼の最期のことばはアマーリアでございました」[13]に至るまで）見事に描いた。だからカーライル[14]がそのシラー伝の補遺でシラーの様式（スタイル）の唯一の例として『三十年史』のグスタフ・アードルフ[15]が戦場で——意味深長な最期のことばを遺して——死ぬ場面[16]

4）同書の84頁，89頁に例証。聖遺物としての最期のことばについては Christoph Sommer, Epilogipie demportuorum, Leipzig und Jena 1676 の序文を参照。
5）Friedrich Schiller, Zürich 1967, S. 20.

を掲げたのも偶然ではない。[6]

シャルロッテがそのとき話したに相違ないシラー自身の最期のことばには諸説があるが，それらはナツィオナール版のシラー全集の「談話（ゲシュプレーヘ）」の巻[17]に重々しく並び記されて出所についても批判的な解説が付けられているばかりでなく，ゲーロ・フォン・ヴィルパート[18]の『シラー年代記』（シュトゥットガルト　1959）の締め括りにも用いられているし，ヘルバート・ネッテ[19]が便覧として引きやすいようにアルファベット順に並べた有名人・著名人の最期のことば集『この世にいつまでもとどまるわけにはいかないではないか』（ミュンヘン　1983）にもいかめしく載っている。それなのに，こともあろうにシラー研究はシラーの最期のことばに，ゲーテ文学が「もっと光を」伝説に払ったような注意を全く注いでこなかったのだ。[7]　シラーの髑髏のほうが偉大なこと（オス マグナ）を奏でる（ソナトゥルム）であろう口の最期のことばよりも興味深かったというわけだ。[20]

ところが彼の死んだ直後の状況は全く違っていた。当時シラーの伝記の最終章に寄せる世間の関心はとても高かった。つまりシラーの場合もやはり御多分に洩れず最期のことば尊重の伝統は実証されたということである。一人の人間が最後の吐息で話すことばは撤回不能の重味のオーラに包まれている。それは伝承が説くように死ぬ人間は嘘をつかないからであり，最期のことばの中にはじめて生の意味と形が打ち出されるからである。あるいはまた最期のときの発言から神秘な領域を垣間見ることが期待され，そこからそれなりのさまざまな意味づけを引き出す人も少なくない。あるいはそうしてみたところでただの俗っぽい開けてびっくりの玉手箱でしかな

6) Thomas Carlyle, The Life of Friedrich Schiller, London 1825, S. 345–352；ここでは S. 351. シラーの最期のことばの技巧については Guthke, Letzte Worte : Variationen über ein Thema der Kulturgeschichte des Westens, München 1990, 47–55 頁を参照。

7) Guthke, “Gipsabgüsse von Leichenmasken”? Goethe und der Kult des letzten Wortes, in : Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft XXXV, 1991, 73–95 頁を参照。

いかもしれないが。[8)]

シラーが息も絶え絶えに何と洩らしたかについてはワイマルではいついつまでも話題にされ，噂が立ち，手紙にも書かれ，風聞は世界を駆け巡り，本当はこうだった，いやそうではなくああだったと議論され，その場に居合わせたわけでもない人の証言が広まったりしている。ジャーナリズムももちろんこのことについて書き立てている。最期のことばが公共の問題であり，文学の問題であることは今日も変わらない。そしてすべての関係者にとって大事なことは正確な，詳細な往生際の台詞である。なぜならシラーの生涯に最終的に押される封印は「真の印（シギルルム ヴェーリ）」であるからだ。伝記作者がモティーフを取り上げるのはそのあとのことである。このこともまた今日も同様である。どの最期のことばが伝えられるかによって意図的にせよ無意識にせよシラーのイメージはさまざまに分かれる。これも言うなれば伝記というジャンルの本質からそうなってしまうのだ。そしてゲーテの場合のようにシラーの場合も最期のことばに，伝記の技巧と科学性について，また D. J. エンライト[21]が『オックスフォード版　死の本』の中で最期のことばの「制度（インスティチューション）」と呼んだもの[9)]について考えさせられる変動幅がある。しかもシラーのイメージについて表立ったあるいは暗黙の論争が展開される領域の精神史的場を言い表わすとすれば，このことば，あるいはあのことばが「高貴なる詩人」の最期の発言としてまかり通っているかどうかの問題であって，シラーがそのような最期のことばをそもそも口にしたかどうかの問題ではない，ということを想起させるのが最も手っ取り早いのではあるまいか。これは例えばおよそ 250 年ほど以前ルターの死をめぐって行われた論争とは明らかに相違する。即ち反ルター派は，宗教改革者ルターは睡眠中に死んだ，ベッドで死んでいるのが発見された，つ

8) Guthke の注6)の書の西欧文化における最期のことばの崇拝についての随所を参照。
9) Oxford Book of Death, Oxford 1983, S. 314.

まり最期のことばを言わなかったと世間に触れて回った。ルター支持者はこれに猛烈に反駁した。というのもこれには神の男が地獄へ落ちるか否かの問題がかかっていたからである。当時一般に広まっていた厳しい『死の作法(アルテス モリエンディ)』[22]の伝統に従えば，もしもルターが突然死を遂げたとすれば，つまり最後の吐息で魂を主の御手に委ねることができなかったとすれば，これは地獄落ちのケースであったからである。しかし教義の世俗化が進んだシラーの時代ではもはやそのようなことは問題ではなくなっている。問題は心像の相違であるが，しかしそれらの心像は必ずしも世俗的性質のものではない。

1805年5月9日のシラーの死の直後の新聞記事が先ず紛糾の口火を切った。『上流社会報』は読者にシラーの死を，「5月9日夕」の日付のあるワイマル発信の無署名の手紙の写しを掲げて報道した（この手紙はフリードリヒ・ポイサー[23]が書いたとの推測もあるが，しかし彼自身は耳証人ではなかった)。[10] その手紙には次のようなことが書かれている。死の当日シラーはしばしば「うわ言を言った」，即ち「戦士のこととか，兵士のことをあれこれと。何度も彼はリヒテンベルク[24]の名を呼んだ。その後……穏やかに息を引き取った――彼の死はこのようなものであった。」[11] この説は1805年中に時勢に便乗して同時に出た2冊のシラー書，クリスティアン・ヴィルヘルム・エームラー[25]の『シラー　その晩年の世界と特徴』（スタンダール）と，ヨーハン・ゴットフリート・グルーバー[26]の『フリードリヒ・シラー　評伝のスケッチ』（ライプチヒ）にも見られる。ヘッカー[27]によれば「捏造の逸話だらけのひどい駄作」(261頁）であるエームラーの書は，このでっち上げかもしれない友人「イエーナのr博士」の手紙なるものを引用しているが，この博士は戦争のうわ言を実にもう具体的に描い

10) Hecker（注1)の書）S. 239. Norbert Oellers, Schiller : Geschichte seiner Wirkung bis zu Goethes Tod, 1805–1832, Bonn 1967 (= Bonner Arbeiten zur deutschen Literatur 15), 22頁以下参照。

11) Hecker 同書，S. 240 (14. Mai 1805)

ている。

「誰が大砲を撃った？」――「誰が左翼を指揮している？」――「ほら見ろ，つるべ撃ちで隊伍が粉砕されたぞ！」――「連隊のきやびらかなこと，白く青い！」[12]

「リヒテンベルク」の名がエームラーではこれらに直ぐ続いて最期のことばの一つとして挙げられているが，グルーバーでも同様で，ただグルーバーは――彼も彼なりにワイマルの差出人不明の手紙なるものを引用しているが――付け加えて，シラーはその直前にリヒテンベルクの書いたものを読んでいたとしている。グルーバーはその前までは『上流社会報』をそのまま借用して，シラーは「うわ言でさかんに兵士や戦争の物音を口にした」と書いているが，それに続いて彼はさらになお，彼の見るところ明らかに本当の最期のことばであるとして「今私には生がとてもはっきりしてきた，実に多くのことが明るく明瞭になってきた」[13]を紹介している。

この説が他にもシラーの周辺で広まっているのに[14]，『上流社会報』がこの戦争のうわ言の話をどこから取材したかは依然として不明のままであるとは腑に落ちない話だ。これについては宮廷女官ルイーゼ・フォン・ゲホハウゼン（現在伝わっている写本『ファウスト初稿』の筆者）[28]が既にもう1805年6月10日カール・アウグスト・ベッティガー[29]に宛てて，これは新聞の「ナンセンスな報道」であり，一言も真実ではないと書いている。[15] ただしシラーの臨終にはゲホハウゼンも立ち会っていなかった。彼女は続けて，これに比べると『アルゲマイネ・ツァイトゥング』が報じていることは「ほぼすべて本当」であると書いている。この新聞が1805年

12） 同書，S. 260.
13） 同書，S. 262.
14） 同書，S. 10, 65, 75, 243.
15） 同書，S. 74.

5月29日に，シラーは「死ぬ間際に生のさまざまな暗い謎を解く重要な鍵を得た」[16]と言って亡くなったと書いた記事ならグルーバーも確かに読んだと見られよう。ゲホハウゼンが直接語るところによると，義姉のカロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲン[30]が「ご気分はいかが？」と尋ねたところ，シラーは「晴れやか，とても晴れやかです」と答え，「今私にはしばしば暗く見えていた多くのことがはっきりしてきました」と言ったという。[17] これと似たようなことをヘンリエッテ・フォン・クネーベル[31]も――彼女もゲホハウゼン同様現場に居合わせなかったのだが――1805年5月15日兄のカール宛てに書き送っており，「彼はとにかくとても幸せに死にました」[18]と付け加えている。信頼すべき情報源であるシラーの義姉カロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲンは1830年になってはじめて『シラーの生涯』の中で発言を求めた。「ますます良く，ますます晴れ晴れとしてくる……これが私に向けた最後のことばであった」，しかもそれは「彼の死の前日の晩」のことだったと。これをシャルロッテ・フォン・シラーはその後「だんだん晴れ晴れ，ますます晴れ晴れ！」と手紙に書いてフリッツ・フォン・シュタイン[32]に伝えたのであった。[19]

さらに別の説を『贅沢とモードの雑誌』（ダス ジュルナール デス ルクスス ウント デア モーデン）が1805年9月「さるワイマルの住人」の寄稿として持ち出した。

> 故人となったシラーがひっそりと仰々しい飾り抜きで若い学者や芸術家たちの手で埋葬されたのは，それが彼の最期のはっきり表明された意志であったからで，死にゆく者のことばだから逆らうわけにゆかなかったからである……[20]

16） 同書，S. 243.
17） 同書，S. 75.
18） 同書，S. 65.
19） 同書，S. 10, 30, 71.
20） 同書，S. 256.

この最期のことばないし最期の願いの情報源となった人物の名は突き止めることはできない。ただ噂の始まりの例証として，また最期のことばのオーラに包むことによってある判断が強調されるという最期のことばの「制度」の「自然史」の中で広まった現象の例証としてとても参考になる。

マス・メディアはそのくらいにしておく。もう分かることであるが，マス・メディアの報道は当時の手紙の証言と絡み合っているし，手紙は手紙でこれまたあらゆる点から見てどうやら印象の強烈な会話や話のやりとりを反映している。[21] 特にそうしたやりとりに，本当の最期のことばの「所有」をめぐる多くのワイマル人の争いに，先に名を挙げた毛髪崇拝者ハインリヒ・フォスも加わった。1806年8月12日フォスは学友クリスチャン・ニーマイヤー[33]にシラーの最後の日々を知らせる手紙を書いたが，この手紙をその後1826年になって『上流社会報』に転載させたのである。「彼の最後の臨終のことばが私の耳に響いてきた」——こう彼は報告を書き出している。この言い方は曖昧であり，文字通りの意味ではないかもしれないが[22]，その効果の的は外しはしないであろう。フォスは同時に二つの説を持ち出して見せる。「午後4時に彼はナフサを欲しがった。しかし語尾のシラブルがよく聞こえなかった」。[23] フォスが誰からこの話を聞いたかははっきりしない。「いずれにしても興味深いのは」とエーラース[34]は解説を入れる。「彼が，シラーは最後にナフサを……欲しがったと書いていることである。」(23頁) 何故興味深いか？　エーラースはナフサを「ランプの油」と解釈するのだ——興味は，ここでもまた一人のワイマル人が「もっと光を」求めた[35]ということにあるのだろうか？　しかしヘッカーはナ

21) 同書，随所に；Schillers Werke. Nationalausgabe (NA), Bd. XLII: Schillers Gespräche, hrsg. von Dietrich Germann und Eberhard Haufe, 432–435 頁以下引用。

22) Hecker 同書，S. 85；NA XLII, S. 724；印刷は269頁参照。Hecker はその信憑性を疑っている，85頁参照；既に以前 Emil Palleske, Schiller's Leben und Werke, Stuttgart [10]1879, Bd. II, 605 頁にも（最初は1859年）。

23) Hecker 同書，S. 88.

フサをランプの油ではなく「薬のナフサ・アセチ。痛風，リューマチ，ヒステリー性痙攣に用いられた酢酸エーテル」と解釈した。このことはヘッカーの手許に届いたもう１通のフォスの手紙の箇所で間違いなく確認されるのだ！[24]このことは後日になって，ナフサ＝ランプの油の要求を執筆願望と結びつける伝記作者の空想――「掉尾を飾る」最期のことばだけを拠所とする空想の妨げとはならなかった。[25]　フォスの第二の説はそれにピッタリ合うものである。「彼は書こうとしたが三文字しか書けなかった。」[26]フォスは夢にも思わなかったが，1832年にもう一人のワイマル人がそれと同じような仕方でこの世を去るのである。[36]　しかしゲーテの死の前からもう霊感の閃いた解釈はこれに反し，人はその人に最もふさわしい仕事をしながら死ぬという，昔から好まれ，またサミュエル・スマイルズ[37]がさんざん使ったパターンに従う――つまりシラーは「自分のために処方箋を書きながらペンを握ったまま死んだ」[27]と。医師（ドクター）シラー？[38]それとももっと効き目のあることを書いたペンを手に握って？　いずれにせよシラーはそのように伝記的視野では生きてきたままに死んだのだ――トーマス・マンはゲーテの死の場合このような考え方にたいへん魅力を覚えたのであった。[39]

更になお別の二つの最期のことばが伝えられている。そしてこの二つのことばはシラー受容の中で他のことばを全部合わせたよりももっと大きい役割を演じた。だれでもがこの二つを知っているようだが，しかし20世紀半ばのシラー記念の年まで続いた論争と問題点のことは分かっていないようである。第一のものは先ず噂を媒体として，ヴィルヘルム・フォン・フンボルト[40]が妻のカロリーネ[41]に宛てた1808年12月28日の手紙の中に現われる。「彼の最期のことばのいくつか――いくつかといっても今何はさて

24）同所；51頁「フォスはシラーに『ナフサを数滴』与えた」を参照。
25）201頁以下を参照。
26）Hecker 同書，88頁以下参照。
27）Karl Hoffmeister, Schiller's Leben, Geistesentwicklung und Werke im Zusammenhang, 5. Theil, Stuttgart 1842, S. 328. Hecker も注1)の書89頁に再掲載。

おいても取り沙汰されているもの――は，『これがおまえたちの天国か？これがおまえたちの地獄か？』でありました。彼がこのことばを独自の真理として言ったのか，それとも戯曲の台詞のように言ったのかははっきりしません。しかしそう言っているときの彼はとても明るく輝いているように見えました。」[28]（つまりこのことばでもう，最期のことばの伝承の歴史の上では異例なことではないのだが，他の一つの説が作り上げられている）。とにかくこの説にはもっともらしい根拠がある。1830年にこの説はカロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲンのシラーの伝記の中に現われる。彼女はいずれにせよその場に居合わせた人物である。「彼はそれからすぐ眠り込んだが」と，彼女は5月7日の晩のことを書いている。「さかんに寝言を言った。『これがおまえたちの地獄か？　これがおまえたちの天国か？』と彼は目を覚ます前に叫んだ。」[29]　この発言とその日付（「前の前の晩」，シラーがますます晴れ晴れとしてくるとのことばを彼女に向かって言った晩の前の晩）は，カロリーネのシラーの死についての別の記述によって確かめられ得る。「上を見上げながら『これがおまえたちの天国か？　これがおまえたちの地獄か？』それから彼は，まるで好ましい幻覚を見るように親しげに上を見上げた。」[30]

1905年以来知られるようになったこの記述は[31]，全く新たな意味合いのシラーの最期のことばをまた一つ持ち出したという意味で興味深い。カロリーネは伝記の中で，シラーが死の朝「意識不明に陥った……支離滅裂なことばばかり，たいていはラテン語」をしゃべったとだけ話しているが[32]，他の記述では次のような詳細を述べている。「生涯最後の朝に彼は何度か急に起き上がり，全力を集中するかのように気高く上を見上げ，何度も

28）Hecker 同書，S. 92.
29）同書，S. 10.
30）同書，S. 30.
31）Aus Schillers letzten Tagen, hrsg. von Hans Gerhard Gräf, Weimar 1905（私家版）。
32）Hecker 同書，S. 11.

『審判者（ユーデクス）！』と叫んだ。」[33]

この重大な意味を持った発言，伝記としてコメントがぜひ欲しくなるこの発言を記したこの記述には残念なことに日付が打たれていない。しかし——いったいこれは特別と言ってよい直接情報なのであろうか，それとももうここで伝説形成がそろそろ始まっているのであろうか（シラーが5月7日の晩に天国とか地獄とか言ったあと更に「今夜は神の思し召しがあればぐっすり眠れそうだ」[34]と洩らしたことをカロリーネが想い起こしたのは，最期から二番目のことばとしてではないかと思われる——「創意に富んだ」カロリーネはこのときヴァレンシュタインの退場の台詞[42]を耳にしたのではないだろうか？　ひそかな埋葬を望んだという最期のことばを想起してもよいだろうし，もちろんワイマルのシラーハウスのアルバムへ書き込んだカロリーネ・フォン・シュヴァルツブルク＝ルードルシュタット[43]の1849年の文句「私が美としてここに感じたことが／真実として迫ってくるであろう」も想起されてよいところである。それもシラー夫人とシラーの義姉がこれこそが「シラーが死の寸前に吐いた」ことばであると彼女に語っていたとしたらなおさらのことである）。[35]

「審判者（ユーデクス）」が作り話であるかどうかの決め手はない。もしもこれが——カロリーネの居る前で？——口にされたとすれば，カロリーネの年代研究（クロノロギー）によればこれが本当の最期のことばであったに間違いない（先ず前の前の晩の「天国と地獄」，次いで前の晩の「ますます良く，ますます晴れ晴れ」，そして最後に死亡当日の朝の「審判者（ユーデクス）」）だけに，ますます残念なことである。印象に残る往生際の台詞——しかし最も信頼できそうな女性証人から出ているものだとしてもその保証は十分であろうか？　確かに他の人々が「保証した」いろいろなその他の話題となった最後の退場の台詞よりも

33）同書，S. 30.
34）同書，S. 10.
35）NA XLII, S. 725.

ましかも知れないが，果たして十分と言えるであろうか？

2

こうした事情が伝記作者に一つの問題を突きつける。ヴォルツォーゲンの原文を全部そのまま引用し，せいぜいそれに何か確証のあるテキストを付け加える程度にして，コメントを添えないでおくしか回避する手段はない。これはヴァルター・ホイヤーの『ドキュメントで綴るシラーの生涯』（ケルン　1967）のようなドキュメンテーションには似つかわしいが，伝記にはそぐわない。はっきり自覚しているか否かは別として単なる記録者以上でありたいとする伝記作者は，既述のようにある特定のイメージを目指し，最期のことばでこのイメージ像に，自分の意図に完全に添うかどうかとにかく記憶に残る最終的な，決定的な表情を描き込む。考えられ得る最期のことばのどれを各伝記作者は選び取るか？　どれには触れ，どれには全く言及しないか？　どれにコメントをつけるか？　それはどの点を勘案してのことか？　例えばそれがほんものであることを証拠立てる新たな根拠があるからとか，あるいはむしろ（自分の考えで）選び取った最期のことばの方が他のものよりもそれらしく思えるからであるとか。アラン・シェルストン[44]はその著書『伝記文学』（ロンドン　1977）の中で見事に要点を捉えて述べている。確かに伝記作者はあることば（特にある名言）が正真正銘最後のものであるか，またそもそもその通りの形で言われたかどうか疑わしい，あるいは疑わしい可能性があるとは充分承知の上であっても，それでもなお含蓄に富んだフィナーレは，それが最も相応しいし，生涯の歴史を理想的に締め括ることになるのだから捨てたくないのである，と（14頁）。

これがオスカー・ワイルドの大いに引用するに値するウィット[45]について言われたとすれば，同じことがシラーのどちらかと言えば悲壮な調子のことばにも当てはまる。伝記作者のディレンマの明白な例は1959年の大著

『フリードリヒ・シラー』伝（シュトゥットガルト）のベノー・フォン・ヴィーゼ[46]の場合に見られる。彼はカロリーネ・フォン・ヴォルツォーゲンの報告に全面的に頼り，二つの報告の不一致に少しも不審の念を抱かない。そこで彼の叙述の最後に感銘的に書かれているのは「審判者（ユーデクス）」である。これが唯一の最期のことばであり，以下のコメントが添えられている。「死にゆくシラーが本当に審判者である神に呼びかけたかどうかはもう判断できない」。これは当然である。何故なら結局「審判者」だからこそ以下の話が進められるからである。即ち，

> いずれにせよ「審判者（ユーデクス）」が，シラーの作品はこれ抜きには考えられないライト・モティーフであることは変わらない。『デメートリウス』ですらなお，さすがにもはやはっきりと挙げてはいないが，すべての人間の歴史もすべての人間の権力や正義の要求もその支配下にあるこの領域を認知している。身を隠した裁きの神が立てたこの「ケルビム[47]の見張り」がなかったら人間は無秩序の歴史に屈伏しているに相違いない。（810頁）

これは，特に父，支配者，神の姿をその宗教史的，社会史的条件の中に強く際立たせるこのシラー研究書の末尾に極めて適った記述である。他ならぬこの最期のことばで「シラーの全部が」プリズムの中に，ボルヘスの「アレフ」[48]の中に集約される――最後の審判としての世界史の理論家シラーを，『群盗』『たくみと恋』『ドン・カルロス』『マリア・スチュアート』『メッシーナの花嫁』の幕切れを，更にフォン・ヴィーゼが思い起こした『デメートリウス』を思い起こすがよい。ここでは伝記作者が，生涯の物語と同じく，事実と固く結び付けてはいるものの，文学で既に承知の技巧を駆使して，デズモンド・マッカーシー[49]が言った「宣誓した芸術家（アーティスト フー イズ オン オアス）」として振舞っている。[36)]

他の伝記作者は違った見方をしている。ハインツ・オットー・ブルガー[50]は，もしも彼が本格的なシラー伝を書いたとしたら最期のときのことばには違ったものを選んだであろうし，シラーの生涯を回顧しても別の解釈を施したであろう。彼の講演『シラーの最期のことば』[37]では，ベノー・フォン・ヴィーゼを引用はするが，これに顧慮することなく「これがおまえたちの地獄か？　これがおまえたちの天国か？」が「文学史，精神史を……ともかく解釈できる」最期のことばに祀り上げられる。その代わり「ユーデクス」に連想を結び付けるのは（何故か知らぬが）許容の範囲を超えることである（402頁以下）と言う。これに反しこの伝記作者（「内面的」伝記作者）が誘われる天国と地獄に対する勝利の連想は，数多くのテキストを引用して首尾一貫シラーの「最も秘められた本質」像を描くものとなる。ただしそれは全く異なったシラーである。即ち「われわれにふりかかる，ふりかかるかもしれないすべてのことに対し」内面的「自由の」人，常に「人間存在の超越」を，したがってその自由を自覚する人である。「この経験をした者ならば『これがおまえたちの地獄か，これがおまえたちの天国か？』と微笑しながら言うことができよう」。

ブルガーとフォン・ヴィーゼはシラーの伝記の歴史に比較的遅く登場し，「解釈可能な」最期のことばについて攻撃的でなく控え目な議論を展開している。では彼らの先輩たちはシラーの最期のことばについてどう考えていたのだろうか？　彼らは最期のことばのどれを選び，それをどのように彼らのシラー像に役立てたであろうか？

---

36) Desmond MacCarthy, Memories, London 1953, S. 32. —— Guthke, Life from the End : Last Words in Narrative Biography, in : Telling Stories, hrsg. von Raymond A. Prier, Albany, N. Y. 1993. を参照。

37) Schiller : Reden im Gedenkjahr 1955, Stuttgart 1955, S. 390–403.

訳　注

1　シラーは1805年５月９日午後５時頃自宅でシャルロッテ夫人（後注４参照），義姉カロリーネ（後注30参照），医師に見取られて息を引き取った。

2　Thomas Mann（1875–1955）はシラーの没後150年に当たる1955年５月８日にシュトゥットガルトのヴュルテンベルク劇場と，５月14日にワイマルのドイツ国民劇場とで記念講演を行った。

3　“Demetrius” は未完となったシラーの悲劇。孤児である主人公デメートリウスはポーランドで成長するが，自分がロシアの皇太子であることを知り，義兄弟に当たる現皇帝ボリスを倒そうとモスクワへ軍を進める。しかしやがて自分が贋者であることを知らされる……。第２幕まで書き上げられたが第３幕と第４幕は断片の草稿で残されたままとなった。第４幕に，毒杯を仰いで自決したボリスの娘アクシニアに恋した純情の青年ロマノフが牢獄の中で彼女の幻を見るシーンがある。

4　Charlotte von Schiller, geb. von Lengelfeld, 1766–1826. ルードルシュタット公国の山林事業部長官の娘。シラーは彼女と1784年に知り合い，1789年に婚約，翌90年２月に結婚式を挙げた。

5　Caroline Louise, Prinzessin von Sachsen–Weimar, 1786–1816. ワイマルのカール・アウグスト公の娘。

6　Livland. シャルロッテは Liefland（< Liefländer）と綴っている。バルト海沿岸のリガ湾とチュド湖（別名ペイプス湖）の間の地域の旧地名。12世紀にドイツ人が開拓，1561年までドイツ騎士団，1629年までポーランド，1721年までスウェーデン，1919年までロシアの領土であった。第一次世界大戦後北部がエストニア，南部がラトヴィアに属した。

7　シラーの妻シャルロッテの愛称。

8　Johann Heinrich Voß, 1751–1826. 詩人で『ゲッティンゲン森の詩社』の同人。シラーの熱烈な崇拝者で，シラーが亡くなった当時はワイマルのギムナジウムの教師を務めていたが，のち1802年イエーナ大学の学長となった。

9　宮廷顧問官夫人とはシャルロッテ夫人のこと。シラーは1790年１月２日マイニンゲンの宮廷顧問官の称号を得た。またのちに彼は1802年９月神聖ローマ帝国世襲貴族に列せられた。

10　Emil Staiger, 1908–1987. スイスの文芸学者，チューリヒ大学教授。

11　シラーが「最期のことばの権威」であることについては『カール・グートケ著　信岡資生訳　ゲーテ時代のドイツ演劇の中の最期のことば』（成城大学『経済研究』第132号所載）を参照。

12 シラーの戯曲『ヴァレンシュタイン』の主人公ヴァレンシュタイン将軍の退場の台詞は，「お休み，ゴールドン！　わしは長い眠りにつこうと思う。このところ悩みが大きかったからな。あまり早く起こさないようにしてくれ」。将軍はこう言って寝室に引き上げ，暗殺者の手にかかるが，観客にはこれが将軍の最期のことばになることがピンとくる。

13 シラーの戯曲『群盗』第2幕第2場で，モール伯爵の次男フランツが長男カールを斥けて自分が伯爵家の当主におさまりカールの愛人アマーリアをも手に入れようと画策，金で雇ったヘルマンにカールの最期を見てきたように虚言させる。ヘルマンは老モールとアマーリアの面前で「彼（カール）の最期のことばはアマーリアでございました」と繰り返し，最期のことばの劇的効果を狙うのである。

14 Thomas Carlyle, 1795–1881. 英国の思想家・歴史家。彼はスタール夫人（1766–1817）の『ドイツ論』(1813) に刺激されてドイツ語を学びゲーテ，シラーを読んだといわれている。

15 Gustav II. Adolf, 1594–1632. スウェーデン王。在位：1611–1632. ドイツの新教徒救援を口実に三十年戦争に介入，「北方の獅子」と呼ばれ勇名を馳せたが，リュッツェン (Lützen) でのヴァレンシュタイン (Wallenstein) 将軍との戦闘で倒れた。

16 シラーの『三十年戦争史』に描かれたアードルフの最期の件りは次の通りである。馬上で戦っていたアードルフは皇帝軍の兵士にマスケット銃で狙撃されて左腕を粉砕される。しかし王はこれにひるむことなく「なんでもない――予に続け！」と叫ぶが，傷の痛みに耐え兼ね，ラウエンブルク (Lauenburg) 公にフランス語で，目立たぬように戦列から離れることを依頼する。二人が迂回している最中に第2弾が王の背中に命中し，これが王の余力を失わせる。「もうたくさんだ，兄弟よ」と王は瀕死のことばで叫ぶ。「さあ，きみはもう自分の命を守れ」。(Schillers Werke, hrsg. von Ludwig Bellermann, 9. Band, 2. kritisch durchgesehene und erläuterte Ausgabe, hrsg. von Albert Leitzmann, Bibliographisches Institut Leipzig, S. 314. なおカーライルの記述については Thomas Carlyle : The Life of Friedrich Schiller, comprehending an examination of his works. In one volume. Ams Press New York. Reprinted from the edition of 1899, London, second printing 1974. を参照した。)

17 翻訳にあたり参考にしたのは次の書である。Schillers Werke. Nationalausgabe. Begründet von Julius Petersen. Herausgegeben im Auftrag der Nationalen Forschungs– und Gedenkstätten der klassischen deut-

schen Literatur in Weimar (Goethe– und Schiller–Archiv) und des Schiller–Nationalmuseums in Marbach von Lieselotte Blumenthal und Benno von Wiese. Zweiundvierzigster Band. Schillers Gespräche. Unter Mitwirkung von Lieselotte Blumenthal. Herausgegeben von Dietrich Germann und Eberhard Haufe. Weimar, Hermann Böhlaus Nachfolger 1967.

18 Gero von Wilpert, 1933– . ウエリントン大学教授でシラー研究家。

19 Herbert Nette, 1902– . ドイツのジャーナリスト，フリーライターとして活躍。最期のことばのアンソロジー『"Hier kann ich doch nicht bleiben" : Eine Sammlung letzter Worte』(München 1983) の編集者。

20 シラーの遺体が葬られたワイマルのヤーコプ教会墓地は共同墓地であった。1826年９月ワイマル市長シュヴァーベ (Karl Lebrecht Schwabe) は，かつてシラーの遺体を教会墓地へ運んだシラー崇拝の青年の一人であったが，この共同墓地を発掘してシラーの遺骸を認定し，その頭蓋をワイマル図書館（博物館も兼ねていた）に安置した。しかしバイエルン王ルートヴィヒ一世の勧告により，ワイマル公は1827年12月これをワイマル王家の廟内に移した。ところが1883年にハレの解剖学者ヘルマン・ウエルッカーが，シラーの死面とこの頭蓋を比較して大きさが合わないからほんとうにシラーの頭蓋であるかどうか疑わしいと主張した。その後1911年チュービンゲン大学の解剖学教授アウグスト・フォン・フロリープがヤーコプ教会墓地を再発掘して解剖学的にも立証できるシラーの頭蓋を発見，種々論争が行われた挙げ句，1914年この頭蓋は最初の頭蓋と共にワイマル王家の廟内のシラーの柩の中へ収められることになった。つまりシラーの頭蓋は二つ存在している。なおワイマル図書館に安置されていた当時，シラーの頭蓋を浄めることになり，髑髏が図書館に近いところにあったゲーテの家に一時移されたことがあった。ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（後訳注40参照）は1826年12月29日付けの手紙で妻に，ゲーテと共にシラーの髑髏の前に座ったことを感動的な調子で知らせている。またこの頃ゲーテは髑髏を詠んだ三十四行の詩を作っていて，ゲーテ自身はその詩に題名を付けなかったのだが，『ゲーテとの対話』の著者エッカーマンとリーマー (Friedrich Wilhelm Riemer, 1774–1845. ゲーテ家の家庭教師で古典古代のあらゆる問題についての相談役であった）はこれに『シラーの頭蓋を見つめて』(Bei Betrachtung von Schillers Schädel) の題名を付けた（以上は Goethes Werke, Hamburger Ausgabe, Bd. I. 679 頁及び新関良三著『詩人シラー　研究と随想』筑摩書房　昭和42年　42–48頁による)。

21 Dennis Joseph Enright, 1920– . 英国の詩人。

22 『死の作法』(artes moriendi) は，中世後期頃よりキリスト教会側から説かれた「良き死に方の教え」で，さまざまな異本が存在する。それらによると臨終のことばによって天国入りか地獄落ちかが決まるとされている。

23 Heinrich Karl Friedrich Peucer, 1779–1849. ワイマルの教会役員会会長。

24 Georg Christoph Lichtenberg, 1742–1799. ドイツの啓蒙主義を代表する思想家。

25 Christian Wilhelm Oemler, 1728–1802. イエーナの教区監督。

26 Johann Gottfried Gruber, 1774–1851. イエーナ大学の私講師。

27 Max Hecker, 1870–1948. 文学史家でワイマルのゲーテ・シラー資料文庫の館長代理を務めた。

28 Luise Ernestine Christiane Juliane von Göchhausen, 1752–1807. ワイマルのカール・アウグスト公の母アンナ・アマーリア (Anna Amalia) の侍女。ワイマルの文芸界では主要な役割を演じた。1871年彼女の手になるゲーテの『初稿ファウスト』(Urfaust) の写本が発見された。

29 Karl August Böttiger, 1760–1835. ワイマルのギムナジウム校長。"Journal des Luxus und der Moden"（後出124頁）の編輯者。

30 Caroline von Wolzogen, geb. von Lengefeld, 1763–1847. シラーの妻シャルロッテの姉。シラーと知り合った頃はルードルシュタットの宮廷顧問官 Friedrich Wilhelm Ludwig von Beulwitz (1755–1829) と結婚していたが，幸せな結婚ではなく，のちシラーの親友 Wilhelm Friedrich Ernst von Wolzogen の妻となった。シラーとは義姉として終始敬愛の念を失わず交際し，彼の臨終にも立ち会った。

31 Henriette von Knebel, 1755–1813. ゲーテやシラーと交遊した翻訳家でワイマル公子の教育係も務めた Karl Ludwig von Knebel (1744–1834) の妹。

32 Friedrich (Fritz) Konstantin von Stein, 1772–1844. ゲーテが深く傾倒したワイマルの宮廷女官シュタイン夫人 (Charlotte Albertine Ernestine von Stein, geb. von Schardt, 1742–1827) の息子でイエーナ大学の学生，のちプロイセンで職に就いた。

33 Johann Christian Ludwig Niemeyer, 1772–1857. ハレで教職にあり，デーデレーベン (Dedeleben) の説教師であった。

34 Norbert Oellers. ボン大学教授。引用の彼の著書は原注10)に記されている。

35 「もっと光を求めた」ワイマル人とは言うまでもなくゲーテのことである。

36 ここで言う「もう一人のワイマル人」もゲーテのこと。三つあとの訳注39

も参照。因にハインリヒ・ハイネ (Heinrich Heine, 1797–1856) も死亡当日の午後「書く，紙，ペン」と何度も呟いたという話が伝わっている。

37 Sammuel Smiles, 1821–1904. 英国の著述家，社会改良家。

38 シラーはかつて「カール学院」(Herzogliche Militär–Akademie) で法科から医科に転じ，卒業論文として最初『生理学の哲学』(Philosophie der Physiologie) を，二度目には『炎症性熱病と腐敗病との相違について』(De discrimine febrium inflam matoriarumet putridarum tractatio) と『人間の動物的性質と精神的性質の関連についての試論』(Versuch über den Zusammenhang der tierischen Natur des Menschen mit seiner geistigen)を提出，regiments medicus（見習軍医）に任官された（1780年）ことが思い起こされる。

39 トーマス・マンは1932年３月21日ワイマルの市公会堂で行った『作家としてのゲーテの経歴』(Goethe's Laufbahn als Schriftsteller) と題する講演の冒頭で，臨終間際のゲーテが片手を挙げて空中へ字らしいものを書いたことに触れ，「ゲーテは書きながら死んでゆきました。意識が朦朧として最後の夢を見続けていたあいだも，彼は，自筆であの美しい，明快な，清潔な筆跡を示しながら，一生を通じてしてきたことをしていたのです」（谷友幸訳『トーマス・マン全集　XI』新潮社　1971）と感動的に述べた。

40 Wilhelm, Freiherr von Humboldt, 1767–1835. シラーと親交あり，シラーの主宰する文芸誌 “Die Horen” に寄稿，シラーを通じてゲーテとも交友した。

41 Caroline Friederike von Humboldt, geb. von Dacheröden, 1766–1829. 1791年ヴィルヘルム・フォン・フンボルトと結婚。幸せな結婚生活を送った。

42 ヴァレンシュタインの退場の台詞については訳注12を参照。

43 Caroline Luise von Schwarzburg=Rudolstadt, 1771–1854. ヘッセン＝ホンブルクの皇女でシュヴァルツブルク＝ルードルシュタット公国のルートヴィヒ・フリードリヒ二世（1767–1807）の妃。

44 Alan John Shelston, 1937– . 英国の英文学者，マンチェスター大学講師。

45 アラン・シェルストンが挙げている例は，パリの安ホテルで瀕死の床についていたオスカー・ワイルド（Oscar Wilde, 1854–1900. 英国の小説家）が寝ていた部屋の壁紙の趣味の悪さを扱き下ろし，「これがおれの命を縮めている。われわれのどちらかが去らなければならない」と言ったというものである。Alan Shelston : Biography, Methuen & Co Ltd, London 1977, 14 頁。

46 Benno von Wiese, 1903–1987. ボン大学教授，訳注17のシラー全集の編者の一人。

47 九天使中の第２位に属し，知恵を司る。エデンの園の守護者。

48 “El Aleph” はアルゼンチンの詩人ボルヘス (Jorge Luis Borges, 1899–1986) の短編小説（1949年刊行の同名の短編集に収められている）の題名で，そのテーマである「アレフ」は輝く玉虫色の球体であるが，そこには「あらゆる角度から見た世界中の場所が混じり合うことなく存在する」。

49 Desmond MacCarthy, 1878–1952. 英国の作家・批評家。

50 Heinz Otto Burger, 1903– . ドイツの文献学者，フランクフルト・アム・マイン大学名誉教授。

あ と が き

本稿は Karl S. Guthke 著 “»Richter« oder »Leuchtöl«? Schillers letzte Worte in der Biographie” in : *Jahrbuch des Freien Deutschen Hochstifts 1992*. Herausgegeben von Christoph Perels, Max Niemeyer Verlag Tübingen, S. 183–204. の翻訳である。